

【文化としての住まいを考える】

4

2017 NO.462

住宅建築

第462号／平成29年4月1日発行
隔月刊年6回（偶数月）1日発行

かめ設計室の仕事 ～生命の樹をはぐくむ空間～

船橋光の子保育園・調布のクリニック・海の家

【インタビュー／濱中久尚】物語を紡ぐ笑顔あふれるクリニックを目指して

山本忠司と喫茶・城の眼 ～地域建築家のつくり出した場所～

瀬戸内海歴史民俗資料館・屋島陸上競技場・香川県立武道館・喫茶 城の眼

【インタビュー／馬場泰子、馬場順子、鈴木清一】城の眼という場所から

【寄稿／松隈洋】山本忠司の求めたもの——風土に根ざし、地域をはぐくむ建築へ

実測図面が語るもの【その5】

坂倉準三のデビュー作「旧飯簀郎」

モダニズムの原点、気韻生動。

金澤良春



二王座歴史の道に面する旧真光寺で展示した竹と和紙を用いたオブジェ作品。庵寺を改修した旧真光寺は、普段、まち並み散策の無料休憩所や市民ギャラリーとして開放している



旧真光寺に隣接する法音寺で内丸研究室が制作した和紙と竹灯籠によるオブジェ作品



うすき竹宵のベースとなる竹ぼんぼり。二王座歴史の道に竹ぼんぼり1,300本が並べられた



臼杵市のまち並み（二王座歴史の道）。石畳の道に武家屋敷や寺院が建ち並ぶ

2016年11月5～6日に開催された第20回「うすき竹宵」で内丸研究室が制作した旧真光寺のオブジェ作品。床に無数の穴を開けた竹を横に並べ、和紙をかぶせることで、竹の内部に仕込んだろうそくとLEDの光が和紙を発光させる。穴の影が何重にも重なり、不思議な雰囲気を醸し出す。空間の奥には横にいくつものスリットを入れた竹灯籠を設置。ろうそくを入れるために溝縁に大粒の穴が前面にぼんやり映し出され、光と影の独特な空間をつくり出す

シリーズ 研究室からフィールドへ 第27回

灯りのまちづくり

うすき竹宵 大分県臼杵市
みずあかり／本妙寺桜灯籠 熊本県熊本市
山鹿灯籠浪漫・百華百彩 熊本県山鹿市
崇城大学 工学部 建築学科 内丸恵一研究室

写真／小林浩志（スバイラル）



20年目のうすき竹宵

大分県の東海岸に位置し、国宝の臼杵石仏（磨崖仏）など有名な臼杵市。武家屋敷や白壁の土蔵などが建ち並び市中心部のまち並みは、大友宗麟が築いた戦国時代の城下町の面影を今に残し、2007年には美しい日本の歴史的風土100選にも選ばれた。

「うすき竹宵」はその歴史的なまち並みを舞台に毎年11月に開催されるまつりである。1997年に日本で初めて市街地に竹の灯りを並べたまつりとして始まった。2016年で20年目を迎え、11月5～6日に開催された第20回うすき竹宵では、まち並みに沿って約2万本の竹ぼんぼりを設置し、32カ所に竹のオブジェを制作。一晩あたり約4万5,000個のろうそくがまち全体に灯され、来場者の数は2日間あわせて約11万人にのぼった。使用した竹は地元の堆肥センターへ搬送されたほか、一部を地元企業が引き取り、竹炭としてもリサイクルされた。

熊本にある崇城大学工学部建築学科内丸恵一研究室はうすき竹宵に初回から深く関わり、まちの人々とともに竹灯りの方法とまちづくりとしてのまつりのあり方を模索してきた。

内丸先生は灯りによるまつり型まちづくりの基本構成として、変わらないものを「ベース」、毎年変化するものを「フロー」、まわりに中心となる骨格を与えるものを「ストーリー」と呼ぶ。うすき竹宵の場合は「竹ぼんぼり」がベース、「竹のオブジェ」がフロー、「般若姫行列」がストーリーとなる。ベース



となる竹ばんぼりは竹を下から二節残して頂部を45度に切り、その中にろうそくをいれる。住民やボランティアが協働して簡単にできることができることがポイントとなる。フクロである竹のオブジェ（インスレーション）は、毎年デザインが変わるためリピーターを呼び込む。内丸研究室をはじめ、研究室の卒業生や様々な団体の有志が参加する。ストリーターの般若姫行列は、白杵石仏をつくったと伝えられる真名の長者と般若姫の伝説に少し創作を加え、再構成した。それによって、うすき竹宵に物語性を与え、全体の雰囲気をつくり出している。

教え子が継続するまちづくり

20年続くうすき竹宵では内丸先生の教え子たちが一堂に会し、竹のオブジェを制作する。2007年に崇城大学を卒業した内丸研〇Bの井上貴文さんは学生時代からうすき竹宵に参加し、熊本で建築の設計の仕事をする傍ら、現在もまつりの時期になると、白杵に戻ってくる。今回も割烹居酒屋・千扇の横にある路地空間で竹のオブジェを展示した。展示場所を提供する割烹居酒屋のマスターはこの路地は写真家に人気のスポットになっている。彼は本当によくやつてくれるので、協力したくなる。良いつながりが生まれていく」と話す。

2006年に崇城大学を卒業し、その後も研究生として2年間内丸先生に師事した井上知裕さんは、学生時代から故郷の熊本県山鹿市で竹灯りを通してまちおこしに取り組む。現在は竹灯り仕掛け人として山鹿を中心に活動している。うすき竹宵にも学

教え子が継続するまちづくり

20年続くうすき竹宵では内丸先生の教え

2007年に崇城大学を卒業した内丸OBの井上貴文さんは学生時代からうす竹青に参加し、熊本で建築の設計の仕事をする傍ら、現在もまつりの時期になると杵に戻ってくる。今回も割烹居酒屋・千の横にある路地空間で竹のオブジェを展覧した。展示場所を提供する割烹居酒屋のスターはこの路地は写真家の人気のスポットになっている。彼は本当によくやつくれるので、協力したくなる。良いつくりが生まれている」と話す。

「りが生まれている」と話す。

2006年に崇城大学を卒業し、その後研究生として2年間に丸先生に師事した。上知裕さんは、学生時代から故郷の熊本・山鹿市で竹灯りを通したまちおこしに取組み、現在は竹灯り仕掛け人として山鹿中心に活動している。うすき竹宵にも学

●内丸研究室卒業生の作品

右左 / 旧山崎家石段に設置された竹のオブジェ。趣向の建築設計事務所へ働く都井一裕さんは手がけた。都井さんとは内丸先生が日本文科大学の講師だった時代の教え子で、戻り出す教育の学生リーダーを務めた。以来20年、旧村に再び帰ってきた。

左左 / 熊本・熊本の設計の仕事をする井上貴文さんが法華小路干留橋に架えた竹のオブジェ。路地の空間の通行性をこのように表現し、人の目を向けさせるがデマンドとして、路地の道幅とのバランスを考慮して表現した。

右下 / 山道を奥点に作り仕掛け人として活動する井上知裕さんが長門県で制作した竹のオブジェ。日本庭園の景色にあらわれてはれるように竹をデザインした。

左下 / 八幡神社の境内に展示された竹のオブジェ。竹あかり屋敷、プロデューサーである三城貴子さんと池田親雄さんが代表を務めるこつまちかんが担当。クリエイティブスタッフである前田福高さんが現地の制作を仕切った。



